

研究ノート

再履修生が語るコミュニケーション型 英語授業の長期的効果

大味 潤

Repeating students' views on long-term effects of Communication-Based English class

OOMI, Jun

Abstract

The researcher used the method of communication-based teaching for mandatory English classes at Japanese colleges in which his students presented positive feedback in a paper survey at the end of the course. Since most students finish his class in one year, the long-term effects of the class were unknown. However, there are cases where the students repeat the class for up to three years. As a result, these students have shown higher-performances in English conversation than other students taking the class for just one year.

The purpose of the survey was to investigate what motivated these students and what led them to have higher communication skills. The researcher interviewed seven students who took the class for more than a year and asked them about their viewpoints regarding their English communication skills.

The results show that they need a certain period of time in order to change their attitude towards English communication and to act spontaneously even to strangers. They also indicate that the pair-work and group-work of the class ease their burden in speaking English and cross-cultural points of view are essential in learning English as a second language. The long-term effects reveal the possibility that Japanese students can be lead not only into more active engagement in English communication in class, but also into more communication with people in all situations.

邦文抄録

この数年間、学部授業として対人コミュニケーションの為の英語授業を行い、そのプラスの効用は学生からのアンケート調査でこれまでも明らかにしてきたが、いずれも必修授業の学生が対象であった為、通常1年間で履修は終わり、その長期的な効果については調査対象とは出来なかった。ところが数年前より再履修授業の担当となったことで、複数年受講する学生が出ており、最多で10コマ(通常の5年分)の履修回数を数えるものもある。特記すべきはこの学生達のコミュニケーション能力が、他の学生と比べて明らかに高くなっていることである。そこで今回はその理由を探るべく、学生有志に個別にインタビューを行い、本人達の声を直接聞い

た。その結果、学生はある時期を超えると英語に対する態度に変化が起こり、初対面の相手にも積極的に関わるようになることが分かった。また授業のペアワークやグループワーク、異文化の視点を持つことなどが、英語の苦手意識を軽減していることも判明した。これにより長期の受講がクラス内での積極的な行動を生み出すことや、教室外でもその効果があることが明らかになった。

キーワード

英語教育 (Teaching English as a Second Language)

異文化教育 (Cross-cultural Education)

英語コミュニケーション (English Communication)

日本語コミュニケーション (Japanese Communication)

1. はじめに

2006年度以降、首都圏の大学数校でアメリカ英語を題材として、異文化理解を目的とする対人コミュニケーションの為の英語クラスを行ってきた。それら授業の成果は紙面によるアンケートを中心に例年検証してきたが(大味：2007、2010)、いずれも1、2年生を対象とした一般教養科目としての授業だった為、僅かな例外を除き1年計2コマで学生は履修を終えてしまい、長期に渡る影響や効果については検証する術が無かった。

ところが2009年度より再履修クラスを週2コマ担当した結果、この数年で通常の2年分となる4コマ以上の履修回数(最多10コマ)をこなす学生や、複数年継続して履修する学生が出ている。しかもこれらの学生は履修回数が少ない学生とは明らかに異なったパフォーマンスを見せるようになってきた。またこの学生達は、アンケート紙面や教員との会話の中で、教員が意図していなかった学習効果を併せて語っていた。

そこで学期終了後に学生の有志を対象に、紙面アンケートでは拾い切れていなかった個人個人の意見を収集すべく個別のインタビューを行った。今回はこの学生の個別の聞き取り調査を中心に、その長期的成果を考察してゆきたい。

2. 調査方法

2.1. 対象クラス

今回の調査対象としたクラスは、4年制大学の必修英語の再履修クラスである。ちなみに今回対象としたクラスの学生達は、数人の例外を除きお互いにほぼ初対面だと言ってよい。

2.2. インタビュー手法

インタビューの呼び掛けは、その趣旨説明と当授業の履修数が4コマ以上と言う参加条件をもとに、受講生全体に学年末に行った。しかし学生の成績や義務感に影響しないよう、インタビューのスケジュール調整やインタビューそのものは、教員の成績提出が終わってから

とした。その結果7人(詳細は以下参照)が名乗りを上げ、個別に話を聞いた(履修コマ数はインタビュー時で最少4、最多9)。インタビュー時間は話の流れに任せた為、15分から40分となっている。また後日、不明な個所を中心に確認の為のインタビューを1人5分から15分を行っている。

インタビュー手法は被験者参加型調査法 (Participatory Research) を用い、調査者がファシリテーターの役割を担いつつ、参加者の発話や意見を引き出す形で会話を進めた。この際教員は教授者としての役割よりも、参加者の学生の目線に立ちながら、自分の意見を言わないように心掛けた。またこの調査法の趣旨に従い、調査結果は学術的な利用だけではなく参加者間でも共有することとし、データ解析後に参加者に対して全てを開示し、この調査研究の成果を還元することとした。

2.3. インタビューの参加者

インタビュー参加者7名のプロフィールは以下の通りで、インタビューもこの順序で行っている。尚、学年はインタビュー時のものであり、卒業したYTを除いて6名は次年度も履修を続けている。

MS(女性、3年生、履修回数6回)は日頃ネイティブとの接触無し。留学経験無し。約1週間のニューヨークでの音楽研修のみ。

YT(男性、4年生、履修回数6回)は仕事でネイティブとの接触有り。留学経験無し。在学中に自分で事業を起こし、既に働いていた。

KM(男性、4年生、履修回数9回)はネイティブとの接触は、ほとんど無し。留学経験無し。

MK(女性、3年生、履修回数7回)は、ネイティブとの接触は、ほとんど無し。留学経験無し。約1週間のNY研修のみ。

AT(女性、3年生、履修回数4回)は、ネイティブは小学校時代に英語学校で遊びながら接触したくらい。留学経験は1週間のNY研修のみ。

AK(女性、3年生、履修回数5回)は、ネイティブとはバイト先で頻繁に接触があるようになったばかり。留学経験はなくて、海外旅行の経験があるのみ。

RK(女性、3年生、履修回数5回)は、留学経験無し。海外旅行の経験が1週間ほど2回あるのみ。ジャズのレッスンを受けている関係で、英語の歌詞の発音練習は受けているが、英会話学校の経験やネイティブとの接触は無い。

2.4. インタビュー内容

インタビューでは当授業についてのみならず、比較対照により主題を明確にする目的で、英語教育全般や日本人に必要な英語力等についても尋ねた。質問項目は下記の通りで、実際のインタビューでの質問も概ね項目では1から4へ、また時間軸でも左から右へこの順序で行っている。

表1 インタビューの質問項目

	それまで	授業を受けて	これから
1. 英語の授業について	学校の授業は〇〇だった。	この授業は〇〇だった。	理想の授業は〇〇である。
2. 自分の英語について	私の英語は〇〇だった。	私の英語は〇〇になった。	私の英語は〇〇にしたい。
3. 異文化理解について	授業でどう扱われていたか。	授業でどう扱われていたか。	授業でどう扱ってほしいか。
4. 日本人の英会話力について	なぜ上手くできないのか。	こういう授業を受けるとうなる？	これから日本人に必要なもの。

3. 調査内容

インタビューが複数の項目に触れながら話が進行してしまった為と、全ての項目について明確な回答が必ずしも得られていない為に詳細な分類は行えないが、以下インタビューの項目順に7人のデータを紹介し議論する。尚、ほとんどのデータでは本人の発話のみを凝縮して表示しているが、筆者との会話のままのデータもあり、その場合の数字は元のデータ内の行数ではない。ちなみにいずれも奇数行が学生のもので、偶数行が筆者のものである。

3. 1. 英語の授業について

3. 1. 1. それまで：「学校の授業は〇〇だった。」

受講前までの授業について聞いてみると、楽しい思い出があるのは7名中RK1人に過ぎなかったが、それは小学校時代のALTの講師による授業であり、講師個人の魅力によるところが大きかったと言う。そしてそのRKもその後の中高の授業は「普通の授業」であり「記憶に残っていない」と言う。

一方で残りの6名はほぼ否定的である。まずMKは英語の授業と言えば文型分類の印象が強く、教科書中心主義で書くばかりの退屈なものだったと述べている。さらに先生の英語の発音にも満足していなかったと言っている。ちなみに彼女は当クラスの中でも群を抜いてきれいな発音が出来る学生でもある。

ATもほぼ同様に文法中心でつまらなかったと評しており、「英会話」と称するクラスでも所詮英会話の教材を読むだけだったと言っている。いずれも基本的には書く方が中心で、話すと言うより読み上げるだけだったと言う。

またAKは中高であれ英語学校であれ、1人で発表させるその形式が嫌だったと言い、その時の様子を次のように説明している。

何か皆恥ずかしいんですよ、中学校の時って、何か読むのも、人前で、その英語って。だから日本語だったらまだあれなんですけど、何か英語って言う、そのもう異文化じゃないですか。もうだから恥ずかしくてその、例えばその「Shall we dance?」とか、それ(ネイティブ)らしく

言うのが恥ずかしいもので、嫌でした、その中学の時。嫌です、だから、だから英語を、もう絶対、好きになれなかったけど(中略)、普通の私生活で絶対使ってやるもんかみたいな、何か本当に。だから不良の人とかって、絶対読まないじゃないですか、そういうの。あたし初めて不良と分かち合った瞬間ですもん、それが。「分かる、その気持ち」って。あの反抗したことなかったんですよ、そのキツイ先生とかも、だけどその授業だけは「いや、無理です。出来ません。」って。

またMSは英語が嫌いと言うより興味が持てないままだったと述べ、その理由を日本語と英語の字面の違いにしか注意が向いておらず、人との繋がりや異文化でのコミュニケーション等がほとんど意識出来なかったからだろうと回想している。

学校の授業は基本的に、英語の授業ですけど、嫌いでしたね。それは、まあ嫌いだった理由は、何か興味が持てなかったっていうのが、多分最大の理由じゃないかなって、多分。それは何だろうな、まあ今、先生の授業を受けて実際に好きになったし、それはすごく興味が出た。っていうのは、やっぱり異文化とか、コミュニケーションとか、そういう、何だろう関わり的な、日本とは何が違うとか、まあ言葉だけじゃなくて、つまり表現だとかそういうのも違うっていうのが分かったから、すごく興味が出たし、だから今は好きだけど。昔はそういうのが無くて淡々と文法ばかり、単語ばかりっていうのをやってたから、あんまり好きになれなかったんじゃないかなって思う。

またYTは他の学科と同様の座学としか受けておらず、また高校時代に通っていた語学学校でも決まりきった質疑応答のような印象しかなく、講師の質問に受講生が順番に答えるという形式を出ていなかったと言う。その結果コミュニケーションと言うよりも「こう、お互いが一方的に英語で、どうなんだってしゃべっているようなイメージ」があったと言う。

普通の理科とか社会とかと一緒に感じの、椅子に座ってこう教科書があって、「はい、これは日本語ではこういう意味です」みたいな。そういう、何か国語とあまり変わらないような授業だったと思うんですけど。あの、何か昔NOVA、英会話のNOVAに行ってたことがあって、高校1年の頃からなんで、3年間ぐらい受けたんですけど、それもあの何て言うか、まあ椅子に座って、その英語の先生がどうのこうのって話したことに対して、まあ相槌だとか自分の趣味はこうなんだということを単純に、あの、まあコミュニケーションと言うか、こうお互いが一方的に英語で、どうなんだってしゃべっているようなイメージが、質疑応答みたいな。そういう感じのことが多かったかなと。

ここでYTが指摘している問題は、コミュニケーションの為の英語教育という世間の風潮に反して、中高では未だに座学の域を出ていないこと、その理由として受験勉強の為の英語に終始しており、テスト対策にしかなくていいのではないかと述べている。従って受験準備はもはや不要になっているはずの大学でそのスタイルが変わらないのは不思議だと言

っている。また稀に会話の授業があっても、実際には学生個人個人が暗記して発表する形式で、一方通行のスピーチにしか過ぎなかったとYTは言っている。

またKMは中高時代に英語の特進クラスにいたと言うが、ここではリスニングを中心にした「受信」専用の勉強で、「発信」する練習はほとんどしていなかったと言う。

会話っていうよりも本での勉強と言うか、どうしてもこう、何て言うんですかね、国語的な感じで勉強が進んでたんで、だからしゃべることに関してあまりこう、進んで出来ないというのか。聞いて理解することは出来るんですよ、その過去、過去形でどうたら言ってるっていうのは、こんなようなこと言ってるんだなっていうのは。でも自分がしゃべる側になった時に、そういうこと文字で考えてしまうとと言うか、伝えるっていうことをやっぱ優先的に考えられないと言うか、何かこう、何て言うんですかね、相手がしゃべってて、それを聞いて、リスニングテストじゃないですけど、ああ、こういうことを言いたいんだなっていうのは、結構大丈夫なんですけど。ただ自分がしゃべる側に回った時に、何か、ああどうやってしゃべればいいんだっけ、みたいな。やっぱり何て言うんですかね、受け身になっちゃうと言うか、暗記でもないですけど、数学的というか、これはこれに当てはめれば、全然○(まる)もらえるかなみたいな。

その結果、入学時にあった英語への純粋な興味は、いつの間にかテストの採点基準に合わせるだけになってしまったと付け加えている。

3.1.2. 授業を受けて：「この授業は○○だった。」

上記のような学生が当授業を受けての感想は果たしてどうだったのだろうか。MKは最初の印象をこう述べている、

とりあえずまあ、初めてインテンシブ受けた時はすごい衝撃的で、すごいインパクトが強くてびっくりしました。取り敢えず、何でっていうか、まず、まず全然書かないじゃないですか、全然書かないし、もう実際に話すから英語を。

YTは同様に、座学ではなく動いて声を出しながらのスタイルに驚いたと表現した。

(この授業は) まあとりあえず、あの、立ち歩いてね、騒ぐっていうのが、まずやったことがない感じですかね。一番違うのは、立ち歩いてわめき、わめき散らすという、そこが一番違うんじゃないかと。

またMSはこの授業の感想として、知らないうちに人との話し方が変わっていると言う。

この授業受けた人は、すごく変わると思う、外人とのコミュニケーションが。それは多分本人たちが気付いてないところで、パッと突然現れたものですぐ対処出来ると思うし、ノリと

かじゃなくて。それが自分も体験してるし、周りの人間もそういうのを実際に体験してるから、まあ(ネイティブに突然話し掛けられるような)そういう機会があれば(無意識に対処してしまうような体験が)あるんじゃないかなってというのはある。

同様にATは授業を通じてクラスメートと楽しく繋がって行き、先述の不安な一人状態でなくなることを付け加える。

この授業は、何か知らない人とも、何か仲良くなれるっていうか。会話が、英語だけど、何かこう、何て言えばいいんだろう、こう仲良くなれるみたいな、授業。何か楽しく英語を学べるみたいな感じがします。多分、えっ、何で楽しかったんだろう、ただ人が楽しかった。人と接することが楽しかった。

KMは授業の緩い基準がありながらも、コミュニケーションを取ろうとする姿勢を評価していたのでやり易かったと次のように述べている。

結構この授業では、何かそういう部分(文法的な正確さの部分)の採点っていうか、そういうところじゃなくて、もっと自分から考えて、意味が伝わればいいからっていう部分に置いてくれてたっていうのは、結構、何て言うんですかね、やり易いっていうか。その会話をしよう、しゃべる相手に話しかけようっていうか(中略)。人と人との、そのつながりっていうか、その会話をする相手と言うか、(クラスメート)に対しての、そのコミュニケーションというか。コミュニケーションを学ぶと言うよりも、コミュニケーションをしようとする授業っていうか、何て言ったらいいですかね。だから、強制されてるんじゃなくて、あくまで自分から、こう何かをしようってするきっかけを捕まえさせてくれるっていうか(中略)、先生が、やっぱりその、例えば違う文章でもいいから、とりあえず意味を、大事な所を伝えて成り立ってれば、それでいいじゃんっていう、まあ、緩いと言うか寛容な部分、そういうところ寛容でいてくれるから、何かこう、ノリではないですけど、まあ、そうですね。何かこう、遊びの延長じゃないですけど、そういう部分が結構ありますね。何かノリで英語使ったりするんですけど、「Hey, you!」みたいなそういう感覚で、しゃべれるっていうのがあったかもしれないですね。

3.1.3. これから：「理想の授業は〇〇である。」

今後受講したい理想の授業について尋ねると、ATは実際の会話練習や文脈の流れの中で英語を修得する方がいいと答えた。これは先のAKが述べた一人だけの発表形式への抵抗感とも繋がっていると思われる。

あたしはそういう方(会話の流れの方)が好きです、何かグループワークみたいのとか。個人的に勉強することも大切だけど、一人でやっても分からないものは分からないし、何か他の、何か答え、答えとか見ても、何かこう、その時は理解したと思うかもしれないけど、何かその教材見てるだけだから、他の子とかから違ったような説明とか、そういうのがあったら

っと分かりやすいじゃないですか。先生とかにも、先生とかだけじゃなくて、他の子が、もしすごい理解してる子がいたら、すごく説明が上手い子っているじゃないですか、そういうので教わった方が全然頭に入りやすいっていうか。

次にMSが対人コミュニケーションを前提にして包括的に英語を学んでいくべきだと言う。

やっぱり英語って元々日本のものじゃないから。じゃあ日本とどう違って、で何か、日本人はこうなんだけど、でもアメリカではこういう感じだから、まあ例えば後ろから声を掛ける時に、ボディータッチをしちゃいけないとか、まあ例えば、うんまあ、っていうのをやっぱ学べたからいいかなって思う。でそれはやっぱりその、今回の先生の授業で学んでなかったら、まあ例えば外人とちょっと話出来たけど、まあ何か「どうしよう」ってこっちが目そらしちゃったりしたら（アイコンタクトが崩れるので）、向こうはまあ会話終わったと思って去って行っちゃったみたい。まあこっちとしては何か全然そんなこととは気にしてなかったから、何か「あれ、会話終わっちゃった」、「あれ、嫌われちゃったのかな」っていう印象しか持てなかったのが、何か、何だろう、あ、目逸らしちゃったから、会話途切れちゃったから、とかまあ、かなっていう解釈が（自分で）出来る。何か、幅広がったし、何かそういう、何だろう、そういう幅が広がる授業の方がいいと思うかな。

一方KMは会話をするとするよりも、相手と繋がる力を身に付けたいと言う。

理想的にはしゃべる、しゃべるっていう、しゃべることが出来るっていうのを何か発見出来るっていうか。自分をもっと外国の方に伝えられて、何か下手くそでもいいから、何か会話が、（言葉を）投げたりキャッチボールが出来るってことを気づかせてくれるっていうか。だから自分の中で英語が出来てる、出来てないとかじゃなくて、あくまでそのツールですから、そのきっかけを発見、見つけると言うか、僕はそういうのが、何か、欲しいと言うか。

またAKは教員が海外で体験した経験談を絡めて英語を理解したいと言い、実際その手の話を聞くことによって間接的に海外を体験しているのだと、次のように述べている。

何か先生の話し、あの、あるじゃないですか、その、テキストとかで、あれを、元にして先生の経験談を聞けるから、自分行った気になっちゃうんですよ、その、あたし完全に色んなところ行ってますからね、あの高速道路も行ったし。もうその先生の話しによると、高速道路も行ったし、あのこういうスターバックスも、向こうの方も行ったし、

この点はこれまでの紙面アンケートでも他の学生から要望が多いところであり、学生が授業で楽しみにしている内容であることが既に分かっている。AKが指摘しているのはこの間接体験は英語での実体験と同様だと言うことであり、また実際に使うことを前提とした第2言語としての英語教育ならば、さらに必須となるべきものだと言っているのである。

3.2. 自分の英語について

3.2.1. それまで：「私の英語は〇〇だった。」

次に受講までの自分の英語や英語観について自己評価してもらおうと、様々な不満が噴出した。まず感性で英語を体感するのは得意だったATは、文法などの規則で英語を理解するのが苦手だったと言う。

英語は好きでした、歌とかそういうリーディングとか、何かリスニングとかが好きで、どちらかと言えば、ですけど。(普通の)リーディングになると、もう分らないなあっていう風になっちゃうから、その英語自体は好きだったんで、昔から洋楽とかすごい聞いてたから。

MKはさらに深刻で、英語に対する自信の無さを次のように表現している。

私の英語は、全然まあ英語なんて今まで全然知らなかったし。元々好きでしたけど、好きだったけど、でもまあ何か、全然、何て言うんだろう、理解できないと言うか、難しいみたいな。書くのも、何か書いてても、ホント文法とか単語だったから、何か全然。多分やり方が悪かったんだと思うんですけど、何か覚えられないし、何か、だから、英語って難しいなみたいな。

AKは発音についてまた別の問題を提起する。日本語での自分の地方訛りが英語にも出てしまうので、それが嫌だったと言う。

取り敢えずしゃべりたくない、自信が無い、何か、訛りって言うのもあって、いや、もう自分の、地方出身なんで。あのただ、こういう都会、ああ、じゃ、あの、東京弁みたいな、普通の人たちからすると、あの日本語であのしゃべってる分には自分の個性だと思えるんですけど、でも英語だと、何か「あいつ!(嘲笑の感じで)」みたいな、何か人目を気にしがちな感じが。

またYTは仕事場での実体験として、英語挨拶程度は話しながらも人間関係を進めるものにはなってなかったと言い、その点で仕事上での意志の疎通が難しかったと言う。

接点無しですね、もう。仕事で必要なことだけ通訳の人を介してしゃべるだけで、後は会話をしない、仕事だけする。人間関係は進まない。仕事終わったら終わり。人間関係も終わり、みたいな。

3.2.2. 授業を受けて：「私の英語は〇〇になった。」

さてこの授業を受けて、各学生の自己評価はどう変化しただろうか。まずMKは自分の意識の変化をこう表現している。

何か、「あ、英語楽しい!」みたいな。もっと何かしゃべれたら素敵だし、何か1つのことで色んな意味っていうか、何かそれぞれ人の解釈があるから、そういうのも何か理解するとすごい面白いから、もっと英語を勉強して理解出来るようになりたいな、みたいな(中略)。何だろう、自分が話してみても、ああ、何か普通にその、文法とかを意識してたけど昔は。なんか、この授業を通じて、その、何か、何て言うんだろう、気にしなくなったと言うか、何か、文法が無くても英語って通じるんだな、っていう。何か、ああ、これはこうだからみたいな、頭で、頭で、頭で考えてから何か、しゃべらないとみたいな、何か(中略)。今はもう何か取り敢えず、出てきた単語を言おうみたいな、何か、言って、「あ、言っちゃった!」みたいな(笑)。言っちゃったっていうか、何か、「感じたらもう言おう!」みたいな、あとまあ何か、大学入ってから英語に、何て言うんだろう、ちゃんと向き合えたと言うか、何かより好きになったから、もっと自分で多分知ろう、知ろうって思って。単語とかも今まで全然やってなかったけど、やろうと思って、そういうのもあると思うんですね、

ATも同様にあまり構えずに、取り敢えず話し掛けてみようと言う気持ちになってきたと言っている。

あ、外人さんいるって思って、何か話しかけようかなとかたまに思って、友達とかという時に、ちょっと話し掛けてみてとか言って、皆で話し掛けようとか言って、まあ話しかけないんですけど。そういうなんか、まあニューヨークに行った時は、結構向こうから話し掛けてくれるから、何か聞こう聞こうって思うし、何かこう、そういう何か、会話が楽しいっていうか、通じた時が楽しくて、あ、分かってくれたみたいな、何かそういうのがあって。何かこの授業やってから多分1つ、ちょっとこうやって何か会話、何か普通は多分いきなり話し掛けられても、「えっ?」ってなっちゃうじゃないですか、日本人って。だけどこの授業受けてて、何か大体そういうの(シチュエーション)がもう分かったから、普通に「Hi!」みたいな、感じで行けたっていうか、そういうのがある気がします。

自分の方言の影響を気にしていたAKは、クラスの周りに巻き込まれるにつれて気にしなくなって行ったと言う。授業での心理状態と羞恥心を克服する過程については次のように述べている。

やっぱり恥ずかしかったですよ、あの英語話すのが、だけど(クラスの)みんな、そのしゃべんない人でも、こう普段無口な人でも、やっぱやってみようとするんですよ、皆。そういうのに励まされたりもして、あたし普段から声出せんだから、だからやんなきゃ損だと思って。自分で多分、あの失敗するのが怖かったんですよ、多分、何だろう。でも一番最初に行けたのは、一緒に仲良いやつがいたからっていうのもあったんですけど、ただあのちょっとずつ自信、自信になったって言うか(中略)。あの1人じゃない、しかもあのさらにその同級生がいたんで、1人でもないし。でもやっぱ恥ずかしさはあったんですけど、こう皆やろうとしてるんで、で何か回数重ねるごとに、何なんだろう、あの失敗してるけど、ここ恥ずかしく

ないやみしたいな、皆笑ってくれるし。日本人あるじゃないですか、失敗するとああ、ドンマイドンマイみしたいな。そういう何かそういうのがあって、何か、いつもらしさが出せたって言うか、適当な感じなんですけど。だから何だろう、やっぱ最初完璧求めちゃうんですよ、やんなきゃみしたいな、って思っていましたね、何か。だからその、アクセントとかも恥ずかしいみしたいな、人前でしゃべれるようなやつじゃないなって思いました。(人目を)気にしてましたね、やっぱ気にしますね。(でも今は)もう無いですね、ただいいやって、もう伝わりやって、何かジェスチャーとかもこうでこうでってやって、あと何か、前使ってた言葉とか、ただ伝えればとか、何か大丈夫じゃないかなって。

YTは自分の英語について、これまでの英語については、発音上も文法上も「日本語のような英語」だと表現し、全てを文字通りに解釈していたと述べた。そして受講後の感想を聞くと、詳細に拘らなくなったことで反応速度が上がるようになったと述べている。

(受講後は)適当になりましたね。その今まで、あの主語とか動詞とか考えたりとか、文法と一緒に考えたりとかしてたんですけど、あの、授業の中で挨拶に使える、あの別に「What's going on?」って聞かれて、「僕は元気です」って答えなくていいとか、ああいうので、文字通り考えなくて、という、まあ何かスモールトークだと思うんですけど。そういうものの、あのボキャブラリーが増えて、まあ向こう挨拶してんだな、じゃあこっちも挨拶しておこうとか、大抵そんなこと言ってんだらうなってことで、それにこっちも大抵答えればいいんだ的な。まあ日本語だってよくよく考えたら、あんまり考えてねえなあって。その殻を破れたと、いう感じですね。

またKMは授業の長期的効果についてこう述べている。

結構先生の授業を何回も受けてくると、何か、今まで海外全然行きたくなかったんですよ。何でかっていうとまあ自分自身が日本を知らなかった。余計にまず日本のことから知らなきゃっていう部分もあったんですけど。でもその英語のその文法が苦手だってそういう意識がどうしてもあったんで、しゃべる時に伝わらなかったらどうしようっていう気持ちが強くて、だから海外行く勇気が無かったんですよ(中略)。日本に来てる外人が、外国の方が、あの片言の日本語でもしゃべろうとするじゃないですか。でこっちとしてもそういうのちゃんと言おうとしてくれてるから、やっぱ聞いた時にこっちも何か、親身になっちゃうとか、そういうものがあるんですけど。逆に自分がそういった時に、何かそうしてくれるか不安だったから、今まで出来なかったんですけど。意外とそういう部分を気にしてるんじゃないって、言いたいことをちゃんと言うっていうこと、言おうとすること、その形っていうものがやっぱり一番大事なのかなって、僕はその、授業で思ったんで。まあ何かこう、もしかしたら意外と、(英語が)しゃべれなくてもでも伝えるっていうことは、意外と出来るのかなって。

3.2.3. これから：「私の英語は〇〇にしたい。」

次にこれから目指す英語力について尋ねると、各々のニーズや理想によって回答は別れた。まずYTはスモールトークと言われる一般的な会話ぐらいが出来るようになれば十分だと控えめに言う。その理由は、仕事上の最終的な細かな打ち合わせは専門用語が多い為、通訳を入れないと無理だからと明かしている。

やっぱりどうせ英語を勉強するんなら、まあちょっと外国の人とコミュニケーションが取れて、うん、最終的には、自分の仕事とかで役に立つレベル、一般的な会話ぐらいができればいいと思いますね、挨拶とか、宜しくとか、それが出来れば僕の中では仕事では使えるので、はい。結局本格的な話をする時は通訳が入るんで、入らないと無理なんで、まあ自分で出来たらそれは最高ですね。なので、通訳さんがいても、ちょっと挨拶だったり、やっぱりやりたいですね、そこは。

またMSは授業後の自分の英語について少し欲が出てきたと、次のように表現している。

(以前は人との繋がりを何も)意識してなかったから、何かあの、私の英語は形だけだった。今思うと。色も何もなくて、ただの〇って感じ。〇とか□とか。でもその今、英語とかそういうのを学んだことによって、それにまあ立体感も出たし、色も付いたし、いい感じになってきたから。あとはもう自分の英語はもう何か、色んな形にしてみたい、って言うのが最終結論。(今度は)自分で作れるようになりたい。

これに対し、AKはかなりの向上心が出来てきたと次のように言っている。

理想像は高いです、あたし、その外国の人に、あの、バイトしてるところで答えられたら、もう、パラって、もうパツて、案内出来るようになりつつ、(授業のスキットと同様に)「OK. Thank you!」って言って行かれない、何回も聞き直されないで。

RKはさらにニューヨークでの経験が、自分の学習意欲に拍車をかけていると言っている。

同時にやっぱり初めてNYに行ったっていうのもあって、もう、それでもっとしゃべりたいなって思いました、今まで使う機会が無かったから(中略)。もう普通にしゃべれたらいいなと思って(中略)。やっぱりあっちに行く日本人モテるじゃないですか、それはもうでも最初から分かってたんですけど、でも何かもっとしゃべれたら、絶対もうずっと面白いだろうなとは思ってました、あと特に音楽やっている人同士とかで、何かアドバイスとかもよくくれるから、そういうの、まあ多少は分かるんですけど、何かやっぱり何だろう、まあ何か聞き流しと言うか、100%じゃないから。

ここでKMは学習法について「文法的に100%正しい英語っていうよりは、むしろもうプロ

ークンでもいいから、話せる状況にしたい」と言い、「そこからやっと、その英語の勉強って
いうものが始まるんだと思う」と言っている。つまり通常なら正しい英語を使えるようにな
ってから、英会話を試みるという順序になっているが、それは寧ろ「逆」だと言う。

英語が楽しい、しゃべることが楽しいから、じゃあもっとちゃんと伝えようって思うから、
いろんな単語やら文法を取り入れるっていう、その姿勢が生まれるじゃないですか。何か、
そうやっていくことで、その、より深さを知れると言うか。何か、皆その気持ちが無い状態で、
その(言葉のキャッチボールで)変化球投げさせられるから、肩壊したり、何か「難しいこと
出来ないや」って義務的になっちゃうんですね、どうしても。

さらに相手に伝えることについて、英語だけに拘る必要もないと付け加えている。

1. 自分が仮に英語わかんなくても、例えばタクシーの運転ちゃんにボラれたら、「何だ、おま
え！」って日本語で怒り返すぐらいの、その、何て言うんですかね、自分を伝えるっていう。
だからもう言葉とか、そういう問題じゃないっていうのはすごい思いましたね。何かジェス
チャーもそうですし、ツールを使ってやってるってことを思わないと、その言葉が全て、っ
て思っちゃうともうおしまいだなって思いましたね。怒ってる、泣いてる、楽しい、ぐら
いは多分分かると思うんでみんな、表情とか動きを見ていれば、
2. ああなるほどね。英語という言語的なこと、言葉的なものだけで考えがちなんだけど、
それ以外でも、例えば何だろうな、のこぎりで切るんだけど、のこぎりが無かったら、包丁
でもナイフでも何かいいじゃないって、
3. そうそう。取り敢えず、「切る」ってことが大事で、その方法っていうのは無限にあると
思うんで、
4. そうだね。そしたら、一番きれいな、一番上等なのこぎりを持ってきて正確にそれを引
く必要はないわけだ。
5. そうですね。日曜大工でいいって思います。

日本語においてもメッセージは言葉だけで伝えているわけではない。しかし日本人の多く
がそこに気が付いていない。その結果英語を学ぶ際にも英語の字面や文法の正確さだけに拘
る傾向があるとKMは指摘している。しかし自分はこの授業のスタイルを通じて、自信が無
くても取り敢えずコミュニケーションの為のボールを投げてみる積極性が付いて来たと言っ
ている。言い換えるなら、教員が授業で英語の正確さに拘り過ぎると、返って学生を委縮さ
せてしまう可能性が高いと言えるだろう。

3.3. 異文化理解について

3.3.1. それまで：「授業でどう扱われていたか。」

このクラスを中心である異文化理解について尋ねると、インタビューに参加した7名全員
がこれまで全く教わっておらず、また知らなかったと言っている。

まずYTは見聞で知識としては知っていても、その意味や重要性には気付かないままでいたと言う。そしてこれらの異文化要素が英会話や英語コミュニケーションに於いて会話のきっかけとなるとは気付き様も無かったと言う。

初めて聞きました、先生の授業で。ああ、そうなんだ。(意味があつて)握手するんだとか。知らなかったです。握手してんのは知ってたんですけど、それがそういう意味があるんだっていうのは、重要度が分かんなかった。アイコンタクトを取るっていう言葉は知ってるんですけど、あの外国人がアイコンタクトをしないと、その(会話の)チャンネルが開かないっていうのは知らなかったです。

同様にATも次のように述べている。

まあアイコンタクトとかは分かってましたけど、握手とかはあんまり、ああ、何かこう、ハグっていうんですか、ああ、外人さんはフレンドリーだろう(だからか)みたいなの。

さらにKMは映画やドラマで見たことのある欧米人の大げさなコミュニケーションについて、等身大の人々がやっていると言う意識は全くなかったと言う。

映画で「Hi, Carl!」「Hi, John!」っていうのは、「What's up!」みたいなのは見たことあるんですけど。何かもうイメージでは「映画だけやろ」みたいな。何かその、地方の子とかが、その訛りあるんだっただ子が、その東京来た時に「皆ドラマの言葉をしゃべってる」って、言ってたんですけど、本当そんな感じで。何か所詮映画の中だから、わざとやってるんじゃないのっていう。イメージが、「フィクションじゃん」みたいなイメージが結構あったんで、大げさと言うか、「これ、サクラだろ」みたいな。

そこで英語を話している時に、視線を自然と逸らすような日本人の行動をこれまで取っていたかどうかを尋ねると、MSはそもそも疑問に思うことすら無かったと述べている。

それは知らなかったから、何も疑問に思わなかったし。でもやっぱり実際、例えば道、誰かに聞かれて、でまあ、知ってる単語並べて言ってみて、みたいな。でも何か、そんな、何て言うんだろう、何だろう、(コミュニケーションが上手く行かず)達成感が無い感じ。何か、手ごたえが無くて、終わっちゃったりとかしたら、「何でだろう」って(思うけど)。まあでもそれは言葉通じなかったのかな、っていう解釈で終わってたけど、分かんないまま、終わってて。まあ、でもまあ後々やっぱり授業受けて思ったのが、何か、こっちが(視線を外すことで)会話途切らせちゃったのもあるし、まあ、「多分(相手が)せっかちだったのかな」ぐらいにしか思ってなかったけど、それ多分文化の違いなんだなっていうのも分かったから。

3.3.2. 授業を受けて：「授業でどう扱われているか。」

異文化要素を中心に据えたこの授業の感想として、KMはまず日本語英語を問わず相手に何かを伝えてこちらも受け取るというコミュニケーションの当然の共通性に気付いたと言っている。

何かやっぱり人と人で、相手の人間性とか表情とか、そういう人間としゃべるって言うか、僕らが英語でしゃべらないで日本語でしゃべっててやっていることを、ただ外国の方にするだけなのに。何かそこで既に、その言葉が違っただけで事務的になると言うか、そういうのがあったんですけど。そうじゃなくて、もっとそういう部分が、アメリカとかの人はこういうリアクションをしたり、こういう部分でそういうのを読み取ったりするんだよっていうのを学んだんで、やっぱそこはより、その重要に、例えば重要視するべきであるので。実際この授業で学べたことは結構大事だなと思ったし、何て言ったらいいかな、こう、何か、相手が思っていることと自分が思っていることってというのが、ただ口だけじゃなくて、そういう動作とか、そういう部分からも伝わるっていうことを、やっぱ改めて思ったというか。

またKMは人との関わりについて積極的になったと答えている。

1. やっぱしちょっと人としゃべるってことが楽しいのかなって思います、思えます。
2. 今聞いてると、しゃべるんじゃなくて、関わるのが楽しい。
3. まあそうですけど。
4. 話す必要が無かったんだもんね、今聞いてると。
5. そうです。そうですけど、何て言うんですか、
6. しゃべってみたい。
7. あ、そう、姿勢ですかね、その関わろうと言うか、自分から進んで、何かどうにかすると言うか、
8. それがだから関わろうとするってというのが、あのクラスでやってるペアワークとか。多分初めて組む人じゃないですか、ほとんどの場合は。それでも何とかなっちゃうってというのは、そういうことなのかな。
9. そうですね。名前を知らなくても、まあ一応ニックネームとか聞いて。で、やっぱ慣れない英語だけど、お互い伝えようってすると、何か気付いたら仲良くなっちゃう、じゃないですけど。

同様にRKはアメリカ人のフレンドリーな行動規範がクラスの雰囲気をよくしたのではと指摘している。

1. 逆に、あれ(異文化要素)無しでクラスって出来ると思う?
2. え〜、それだったら多分そんなに仲良くなれなかったと思います。私は皆と、そこまで。
3. ん、あれをやったから仲良くなったってこと?

4. え、握手って大事ですね。

MKは同様にこの点を次のように述べている。

距離も縮まりますよね。その何か、その、その、知り合い的な。何か、人間関係が、縮まるし、そう、話しやすくなるし、授業も一緒に受けやすいし。

異文化要素の要の一つである「握手をすること」については、RKに限らず7名全員がその重要性を口にしてしているが、特に女性5名はこの傾向が強いようである。さらにATはこのようなルールを共有すること自体が、初対面の人とも上手く行ったのではないかと述べている。

全然ホントに知らない人ばかりじゃないですか、この授業は。だけどそういう人でも何か握手したり、結構近い感じで話さなくちゃならないっていうのに、最初は抵抗があったんですけど。ホントに知らない人だし、コミュニケーションとか、そんなに。ちょっと人見知りなんで、そんな話し掛けられないと思ったし。(でも)全然慣れちゃって、全然何か当たり前と言うか。

MKはさらにクラスの外でも変化があったと言っている。

今まで全然そういう握手とかもやってなかったけど、その、(この)インテンシブを取ってない人とかにも、何か、(日本語のコミュニケーションでも普通に)やるようになって、何か、「ああ、明るくなったね」みたいな、とかは周りから言われたりします。うん、変わりましたね。

英会話についての変化もさることながら、他の参加者も口を揃えて日常の日本語でのコミュニケーションにおいても変化があったと言っている。

3.3.3. これから：「授業でどう扱ってほしいか。」

インタビューした7名はいずれもこのような異文化要素は誰でも知っておくべきだと言い、それはこの授業に限るべきでないと言う。中でもYTはこの異文化要素は「最重要ポイントとして」掲げるべきだと言い、またMKはこれらを英語の実際の動きの中で学んでいくべきだと言う付け加えている。

勿論その取り、取り入れてほしいと言うか、バンバン入れちゃって。英語の授業でもなんか、やっぱり何か座ってたりしてもダメだと思うし、何か(この)インテンシブだと、何か実際に立ってやってるから、それもいいかもしれないし。

今回の項目全体の中でもここは特に重要でコメントは他にも多いが、他の項目と重複している回答が多いので、後に合わせて議論したい。

3. 4. 日本人の英語力について

3. 4. 1. それまで：「なぜ上手くなれないのか。」

日本人全般について何故英語が苦手なのかを尋ねると、AKはそもそもキャッチボールのような双方向の英会話練習をやっていないことを指摘し、相手の反応が無いことが多いスピーチ練習を批判しながら次のように語っている。

あの、会話が突然アメリカ人とか会った時に、しゃべれなかったりするの、多分授業で会話をまず練習した覚えが無いんで。だから一方通行なんです、何か、日本人がやるやつ。その、返ってこないんですよ、こう、読むだけで。こう、相手がいると違うのかもしれないんです、その会話の形式も。

YTは自分の実体験も含めて、日本人が話せない理由について、英語で話すきっかけ作りが出来ないからではと、以下のように述べている。

日本人はシャイだからじゃないですか。性格的なもの。後はやっぱ僕が、経験上大切だと思って思った握手とか、その、そういうのがまずそもそも分かってないじゃないですか。で、分かれば、あの実際僕も仕事場で話したりとかして、英語話すきっかけにもなったっていうか、まあスモールトークの休憩中とかの会話が出来たんですけど。あの、それ知らないと英語しゃべる機会無いじゃないですか。

MKは英語について難しく考え過ぎているのではと述べた後で、発音の問題について以下の様に指摘している。

まあ、恥じらいもあると思いますね。何かやっぱり自分の発音を聞かれないのはみんなそうだと思うんです。慣れちゃえば平気だけど、その慣れる前、までがちょっと恥ずかしいと言うか、ちょっと嫌だなあみたいな、恥ずかしいみたいな。ああ、自分、何、日本人みたいなのに、とか。後なんだろう。これはあの、後輩が言ってたんですけど、なんかその、自分が今すごく勉強したくて英語を、で何か今度海外行くみたいなんですけど。それでなんか皆に言ってないらしくて、その、海外に行くみたいな。で、あの、英語の試験を受けるんですって、その仲間で。それでなんか、何で言ってないかっていうと、その、自分の発音聞かれるのも恥ずかしいし、その自分のプライドがあって、その、ちょっと人より上にいて、いて、何かこういう(見下ろす)感じで。だからそういう人は多いんじゃないかな、とは思います。

同様にKMも正確な英語に拘るばかり、日本人は肝心の相手を見ていないのではと指摘する。

恥ずかしがり屋な部分あると思うんですよ、日本の人って。ちゃんとこの通りであってなきゃ恥ずかしいとか、まあ完璧な英語をしゃべらないと、なめられるじゃないですけど、ある

と思うんですね。その、相手を見ていないと言うか、言葉を見てるっていうか、(周りから)見られることにだけ気にしてると言うか、ちょっとある気がしますよね。

MSは日本人の英語力について、英語圏の文化や風習を含めこう表現した。

言葉が違うっていうので、やっぱりその文化も違うし、風習も違うし習慣も違うから、まずそこを理解してないから。だから何か、それを踏まえた上で、こういう風な表現がいいとかってというのが考えられないんだと思う。それ、文化とか風習とかが分かってないから、で、まあ、あのいくら文法とかそういうの学んだところで、やっぱそういう風習とか、そういう根本的なものが違うっていうのを理解しないと、結局そこは形だけになっちゃうから。文法っていう、自分の中に何か、とりあえず日本人が訳した英語がある。でもその風習を学べば、何かアメリカ人とかそういう外国の人が何が言いたいのかっていうのを踏まえて、まあ英語で理解できるっていう、その辺の違いじゃないかなって言う。

KMはさらにコミュニケーションにおける日本人の言語の捉え方についても述べている。

コミュニケーションって言う言葉を、もう既に身構えて受け取ってるんですね、今こう言ってる、自分が言っても思うんですけど。ただ、ただしゃべって、飯食って、帰って寝るっていう生活の一部なのに、コミュニケーションっていう言葉を意識しちゃうと、もう「やばい、しゃべんなきゃ。どうしようどうしよう。全然ダメだ!」みたいな。(やっぱり)しゃべんなきゃって思っちゃいますね、すごい思いますね、言葉が通じないから言葉を意識しちゃう。

3.4.2. 授業を受けて：「こういう授業を受けるとどうなる？」

受講後の感想として、まずAKは自分のこととして次のように答えている。

まずあたしみたいに英語真っ平ごめんだって思ってた人が「ウツ」って、こうちょっと、身を乗り出し始めますよね。興味持ち始めますよね。まず何だろう、あのクラスとか別にして、何だろう。まあそれより最初は追い込まれるんですよ。あの、時間との闘い、(会話練習の)スケジュール決まってるから、追い込まれるんですけど。結果、やって、あの何だろう、結構、いやまず数重ねることによって、まず恥ずかしさが取っ払われてくる。で、ちょっと、あれっ、これ喋れてるんじゃないかと勘違いしてくる。それで何か、そう、それで自分の中で変わってきたって思ったら楽しい。

同じくMKは時間的に追い込まれることで、嫌でも変化せざるを得なかったと言う。

こういう授業受けると、結局みんな、もう嫌でもやることになるから、何か嫌でもやるし。最初すごい下手くそでも多分慣れると思うんですよ、こう、やってくうちに。だからまあ、すごいいい授業だと思うし、うん、何だろう、まあ慣れ、慣れますよ(中略)。そう、だから

今までの、その大学入る前までの授業とかも、何かホントに頭で考えて、何か文作ったりとかそういうのが多かったから、結構そういうの染み付いてる人が多いと思う。だから何だろう、ホント今小学校とかでも英語とかやってるところいっぱいあるけど、何かホント、こういう授業をいっぱい取り入れていたらいいなって、とは思います。

さらに個人の変化として、AKはこう付け加えた。

いやあの、私は元々、だからその前に出るタイプじゃなくて、ホントに、あの、本当のところは(中略)。でもやっぱり、英語の時はやっぱり抵抗があったんですけど。何だろう、二十歳になって、こう、変われることってあるんだなと思って、はい、正直驚いてます。自分で、でその、今、丁度3年の時に、あの、そのタレントスクールも通うようになって、あの、そこでも練習が出来たって言うか。あの、人前で、はい、やっぱ場数を踏む方がいいですから、っていう。何か色々プラスになるように考えて行けたのは、やっぱりこの授業があってこそみたいな(中略)。だからホントに、人前に立つのが辛くなくなったって(いうことが)、何が変わったって、一番の決定打は。

RKは日本人が英語をそもそも使う必要が無いから上手くなりようがないと言い、先のニューヨークでの体験から、使う場面に追い込まれば使うようになるだろうと言っている。同様にこのクラスではペアワークの形で追い込まれているので、使うようになっているのではとも言っている。

あたしNY行って、そのフェイスブックで繋がった人、出会った人、結構いっぱい繋がれたんですよ。で、何か帰ってきてから、あの、メッセージくれたりとかして、でもそれ一々やっぱ、もうホント一文でも超考えるじゃないですか、あ、だからそれで何か勉強しようって言うか、勉強しようじゃないけど、何て言うんだろうみたいに、超一生懸命考えました(笑)。

RKは日常でも同級生同士で英語を使ってみていると言っているが、さらにニューヨークでの体験としてアメリカ人に思わず日本語で話してしまったというエピソードを紹介してくれた。

(英語が浮かばない時に日本語で)「スゲ!マジ、スゲ!」みたいなこと言ってたら、横で。「ヤバイ、ヤバイ」とか、ずっと言ってたら、それは何て言えばいいの、すごい、って何て言ったらいかが分らなかった(中略)。「すげえ、マジ」って、日本語で(笑)、でも黙ってるよりは良くないですか。

また英語の授業で異文化の問題を同時に取り扱っていることについてどう思うか尋ねると、MSは無意識に動作が身に付いてきていると話し、また他の受講生も同様の体験をしていると付け加えている。

例えば、うーん、そうだな、握手は女性からとか。だからそういうので実際にコミュニケーション能力が増えたかな。今までは外人と話してたら、何か別に日本人って会ったら本当に正式な場でなければ握手はしないと思うんだけど。でも例えばちょっと挨拶がてらに握手するとか、今まではそんなの外人と話した時に、えっと、そんなこと思い付かなかったけど。まあ前にバイト先に来た人で、まあそういうの頭に入ってたから、まあ自然と手が出たし、それで多分(携帯の)アドレス聞かれたんだと思うし。それが何か考えなかったから、その時は。この時こうしなきゃいけないんだ、ああしなきゃいけないんだっていうのを考えないで、日頃から授業でやってたから、(握手しようと)スムーズに手が出たし(中略)。自分自身ではスムーズになった。それはあの、それはあの、何か、何人か友達ともそういう話してて、前にYとかが、道を聞かれてまあ戸惑ったけど、パッパッパッって並べたら、前は多分戸惑って多分拒否してたけど、でもその時は何か拒否せずに、何か、パッて出てきたから、で、今まで逃げてたのが逃げずに済んだって。それは何だろう、多分パッて出てきたからじゃないかな。相手が何を言ってるかも理解できたし、こう言えば、あの、身振り手振りで伝えれば、とりあえずどうにかなるっていうのが分かったからじゃないかな。

YTは仕事上の体験から次のように言う。

(相手のチャンネル開かせることを)やっぱ自分で経験しちゃったから強いなあ。ほら、1番強いのはその相手を、興味を持ってもらう、そうすれば向こうが勝手に来るから。結構、しゃべってると、あの外国の人の、こっちを向いてもらったら優しいもんで、まあ向こうも日本で仕事してるんで、こっちが英語しゃべれない、そんなに流暢にしゃべれないこと分かってて、だから向こうもそれ分かった上で、やっぱしゃべってくれるじゃないですか。だからこっちに興味さえ引いてもらえば、スムーズになる、はい。結構優しいですよ、外国人(笑)。

YTはさらに実際の仕事の場面で、相手の反応や仕事の進め方がどう変わったかを教えてくれている。

「圈内」「圏外」*っていう、それがこの授業の、僕の中で一番学んだことで、でまあ、この授業始まってから、「ああ、そうなんだ」と思って。仕事で今まで「Nice to meet you!」ぐらいの英語で挨拶をして、後はまあ、後はエンジニアとその出演者じゃないですけど、その英語をしゃべる人っていうことで仕事をしていると、その握手もそうなんですけど、文化的に、習慣的に握手する文化だっているのを分かってから、じゃあ、こっちから握手してみようかなとか、使ってますね、はい。そういう風にやっていると向こうの反応が良くて、あの休憩中とかに向こうが話しかけてきたりとか、そんな感じですね。(今までは)無かったので、それは、話しかけてきてくれるっていうのは、やっぱまあ最初の挨拶で、その「Distance」とか「握手」とか出来たから、多分こっちに興味持ってくれたのかなあと思って。で、そこまで行くと結構、もう向こうがこっちの方に、興味持ってきてくれてるから、何かこっちも色々片言でも英語でしゃべり易くて、コミュニケーションが取れるようになったなあっていうことがあります

ね。みたいですね、分かんないですけど。ただ相手の名前を知ってれば何とかなる。(以前は)名前も使ってなかったですね。授業でやった、その1番最初の「Hi, 何とか」って名前をいうのをちょっとうまくって仕事で使ったら、向こうがちゃんと振り向いて「おう、何?」って来るようになったんで。

*授業での講義での携帯電話の比喩のことで、英語を話す文脈に身を置くことを圈内、日本語の文脈のままでいることを圏外と呼んだ

またKMは外国語のコミュニケーションでも、試行錯誤しながらの結果オーライで済んでしまうかもしれないことに改めて気づいたと、友人を例に出してこう付け加えている。

海外に行く友達とかいるんですけど、あのワーキングホリデーとかで、やっぱりそういう子は、あんま考えてないと言うか。私しゃべれないけどまあ行けば出来るでしょみたいな感じで。そういう子が意外に、楽しい楽しいみたいな感じで言っていて、すごいなって思うんだけど。でも実際その、僕がすごいなって思うのは、その意識の壁というか、身構えてるせいだと思います。周りかそういう人しかいないから、だから、意外と、その、何だろうな、そんな考えてどうこうって言うことじゃない。そういうその、何て言うんですか、無駄な意識、予備知識じゃないですけど、そういうものを全部排除することが一番、やっぱ必要かなって。

3.4.3. これから：「これから日本人に必要なもの。」

YTはインタビューの最後に英語教育の問題点の一つを指摘する。すなわち教員は学生の英語の発話に親切に耳を傾けるだけではなく、教員の注意を向けさせる英語を学生が身に付けるように仕向ける必要があるということである。教室のペアワークでは、相手が教員であれ学生であれ、必ず聞いてくれることになっているが、実際のコミュニケーションではそうは行かない。そしてまさにこれこそが日本人が抱えている問題だと言うのである。つまり相手のチャンネルを開かせる方法を日本人は知らない。その結果、相手と英語を話す機会が圧倒的に少ないという悪循環に陥っていると言うのである。ここで日本人がこれから必要になるものについて尋ねると、彼はこうまとめてくれた。

1. まあ、やっぱり機会を増やすこと、。その機会を増やす為に、話す機会。
2. そうすると、さっきのところに戻って、話す機会を増やすには相手のチャンネル開かせなきゃいけないからってことになるんだ。
3. そうです。っていうか、まあ先生達もそのお金もらって先生やってるわけで、こっちが話していることを最後まで聞いて、最後まで聞くわけじゃないですか、
4. ああ、そっか。ええと、聞く役割の人だから、授業中は少なくとも聞いてくれるわけだ。じゃあ、注意を学生が振り向けさせたんじゃないかと、振り向くことになっている人達なんだ。ああ、なるほど。でも現実はどうじゃないと。
5. 現実はどうじゃないと。それはしゃべれるわけがないと、現実では。

6. そうしたら、ALTの先生もそうだったのかな。
7. ALTもそうですね、実際。
8. そっか。どんなに、どんなに下手な、どんなに意味の通じない英語でも全部聞いてくれる人達なんだ。優しく、うん、授業時間内は。
9. お金をもらってるから。
10. そうすると逆に言うと、英語の先生が本来しなきゃいけないのは、授業だから聞く英語じゃなくて、普通に聞く気になる英語をしゃべれるようにすることかな。英語の先生が本来しなきゃいけないのは、授業だから聞く英語じゃなくて、普通に聞く気になる英語をしゃべれるようにすることかな。授業の中で上手く行ってるかどうか、じゃないんだ、では。
11. はい、もう向こうは聞く気になってるんで、授業では会話が成り立つに決まってるじゃないですか。授業だから。
12. そうか。だから例えば(君が既に)仕事で使ってるって話があったけど、その、実際に英語使うとなったら、その前提がないから、そこは自分で作んなきゃならないんだ。人間関係をスタートさせる為の英会話術かな。
13. そう、英会話術、人間関係構築術。

4. まとめ

4. 1. 英語の授業について

学生はいずれも英語は好きだと答えていた一方、どこかに苦手意識があったようである。しかし中学高等学校を中心に英語教育全般に対してはかなり批判的なコメントが続いた。学校側の建前であるコミュニケーションの為の英語教育に現状は程遠いとし、読解や文法説明に終始する往來型授業や、さらに「英会話」や「スピーキング」としながらも、実際は演者から聴衆への一方通行になりがちな「スピーチ」に一元化する授業に対しても、あまりに非実践的で全く興味が湧かなかったと答えている。特にスピーチ発表のような独り舞台になりがちな授業活動に対する拒否感は強いようである。対してこの授業ではペアワークやグループワークが効果的に作用しており、英語に対する積極性や楽しさを実感したと答えている。

4. 2. 自分の英語について

自分の英語については、これまでやらされ感が強く、自信が無かったと言っている。特に高校受験や大学受験の為の点数稼ぎの英語学習にしかなくなっていなかったと言っており、MSはこの状態を「色も立体感も無く形だけだった」と表現した。一方で当授業受講後は、いずれの学生も英語や日本人同士の対人関係でも自信が付き、また英語そのものに興味や関心が広がったと述べた。その結果、海外に出たくなっていると言うKMのような学生も出ている。

4. 3. 異文化理解について

異文化理解については、全員がそれまでの授業いずれに於いても全く扱われておらず、全

くの無知だったと述べている。また映画やドラマで目にしたことはあっても、それがどのような意味を持つものかについては疑問を持っていなかったと言っていた。一方でこの授業で学んだことを実地で使った経験が既に全員にあり、いずれも有効であったと答えている。英語に限らず他の語学の授業でも、このような学習項目を必須にすべきだと、これも全員が述べている。

4. 4. 日本人の英会話力について

上記の回答がほぼ同内容であるのに比べ、ここでの回答は各学生の個性的な感想が述べられた。英語の正確さに拘る余り言葉以外の手段を使っていないと指摘するもの、日本との違いを知らないまま異文化に接しても何も吸収出来てないのではと指摘するもの、また現在の英語教育は話すきっかけがあるという前提に組み立てられているが、日本人が苦手なのはこの話す機会を作る能力だと述べたもの、日本人には自信無いまま見切り発信をする勇気が必要だと言うもの、自分の感性をもっと使い英語量をこなすべきだとするもの、また失敗しても気にならないクラスの雰囲気作りが必要だと述べる学生もいた。

4. 5. 授業の長期的効果について

以上の考察から当授業の長期的効果、すなわち4コマ以上の履修回数の効果を考えると、結論は以下の通りである。

1. 英語の正確さに拘らなくなることで失敗を恐れず、たとえジェスチャーや日本語ででも、相手に自分のメッセージを伝えようと試みるようになる。
2. 英語(米語)のコミュニケーションパターンを知ることで英会話での異文化対応能力が付き、異文化コミュニケーションに積極的になる。
3. 仲間意識を通じてクラスでの達成感が自信や楽しさを生みだし、それが語学力や異文化コミュニケーション全般での向上心へとつながっている。

最後に今回のインタビューで象徴的だったYTのコメントを付け加えておきたい。これはインタビューの内容確認の際のメールのやり取りで送られてきたもので、自分のデータを見ての本人の感想である。

思った以上に自分の考えていた事を話し出来ていたようで良い印象を受けました。先日も講演会で日本語から、中国語、英語、ポルトガル語への同時通訳をFMで飛ばす仕事をして来ました。やはり今回も感じたのが、「外国語で話しをする」のと「外国人と話しをする」のの違いですね。実際に自分が必要なのが、英語を流暢にしゃべる能力でなく、外国の人と話す能力なのです。先生の授業を受けたことの無い人には分からないニュアンスかもしれませんが、「外国の人と話す能力が付く授業」、と言うのが、先生を私なりに解釈したキャッチフレーズのような気がします。

(原文そのまま)

我々英語教員は学生の英語力向上だけを大義名分として掲げているが、それが必ずしも学生のニーズに合致していないと考える必要があるだろう。

5. 最後に

このような異文化理解の授業を行った理由には、多文化教育という自らの専攻分野が多分に影響してきたことは否めないが、一方でTOEIC一辺倒になりがちな現在の英語教育の潮流に一矢報いたい反抗心もあった。そもそも英語専攻でもない学生の一般教養課程の授業では、文法中心の授業では関心を向けさせるのが難しいと考えたこともその理由としてあった。よってペーパーテストで計測可能な語学力よりも、将来外国人を相手に使うであろう英会話の形式で、目の前の対人コミュニケーション力を重視した授業を行ってきたのである。

教員が意図していた異文化適応を目的としたこの授業は、果たして学生達に対して好意的に受け入れられ、かつ実践的だとの評価を得ていた。特に文法を中心とした英語力に拘らなかつた結果か、外国語で話をするのではなく外国人と話をする授業である、と評した学生もいた。実際、英語の正確さには拘らず、たとえ日本語であっても取り敢えず相手に話してみようとする態度が、7名全員から聞き取れている。

また個々の学生より時間数は多少異なるが、授業の効果を実感するのが履修コマ数3、4コマ目辺り(通常の1年半から2年分)であることが分かった。これは複数回履修している学生のパフォーマンスが、履修回数が少ない学生と著しく異なっているとした筆者の印象と一致した。但し授業内であれ授業外であれ、その動作や言動が無意識に出ている為に、その動作が身に付くまでの正確な必要経過時間は残念ながら不明であった。この為、継続して行っている次の調査では、履修コマ数が2～4回の学生もインタビュー対象としているので、次の調査課題としたい。

また一方でそれまでの座学の授業と余りに違う為に、不適応を起こしてしまう学生の存在も示唆されていた。その結果、仲間作りのきっかけとなる会話内容や授業活動を、特に学期初めの2回の授業に盛り込むようにとの要望もあった。次年度より、改善していきたいと思う。

「参考資料」

Ada, A., & Beutel, C., 'Participatory research as a dialogue for social action.' Unpublished manuscript, 1993.

Park, P., 'What is participatory research?: A theoretical and methodological perspective. Unpublished manuscript.' University of Massachusetts, 1989.

大味 潤、「異文化教育を中心とした英語教育の実践例」、『尚美学園大学総合政策紀要16、17号』、2007、95～108頁。

大味 潤、「尚美1年生の英語受容とそのニーズについての考察」、『尚美学園大学総合政策紀要20号』、2010、1～15頁。

今回の論文は2011年6月にJACET関東部会にて行った個人発表「英会話授業を通じた異文化適応の成果の一例 ―再履修生が語る異文化理解の授業効果について―」の内容を、その後データを追加してまとめたものである。